茂木虎雄先生記念号によせて

茂木虎雄先生は，1950年３月立教大学経済学部経営学科を卒業され，その後高崎市立短期大学助手・専任講師，明治大学経営学部専任講師・助教授を経て，1968年に立教大学経済学部に助教授として赴任され，教授を経て，本年３月に定年で退職されました。この間，28年の長きにわたり，本学ならびに経済学部の発展のために貢献されました。また，1983年に経済学博士（立教大学）の学位を授与されています。

先生は，経済学部および大学院経済学研究科で「会計史」を担当し多くの学生・大学院生を指導され，教育と研究に尽力されました。また，1981年４月から1983年３月まで大学院経済学研究科博士課程前期課程主任を務められ，大学院の研究・教育の充実に貢献されました。

先生の研究業績は，多くの著書・論文に纒められていますが，大きく分けて三つに分類することができます。第一に，中世ヨーロッパ会計史の研究を挙げることができます。従来の会計史研究が簿記書の歴史であることが多いのに対して，実際の会計帳簿の分析による会計史研究をめざし，一貫してこの研究態度を貫いてこられました。先生は，現金の収支計算を会計の基礎にあるととらえ，1211年の帳簿に複式簿記の起源を求めるという会計史研究上極めて重要な問題提起を行い，さらに，単なる帳簿の分析だけでなく，個々の会計史料を結びつける論理が必要であるとされ，大塚史学にもとづいて研究され，そのプロセスで，従来は第13～15世紀イタリアと第19世紀イギリスが分析の中心であったのに対して第17世紀オランダの分析も含め「会計世界一周論」を理論的・分析的に提示されました。これらの研究は著書『近代会計成立史論』（未来社，1969年）に纒められ，その著書は漸新で画期的であることが認められ，1970年日本会計研究学会太田賞を受賞され，以後の会計史研究に大きな影響をあたえられました。

つぎに，複式簿記の基礎理論，特に勘定学説研究が挙げられます。複式簿記の記入のルールに関する体系的理論的な説明についていまだ統一的な学説が存在しないこと，また，簿記の説明と会計の理論との断絶を解消しようという問題意識のもとに，諸学説の検討を通して勘定理論の体系的な説明を試みられました。これらの研究は『複式簿記の基礎理論』（1963年，日本評論社），『複式簿記の理論と演習』（1985年，文真堂）他多数の論文に纒められ，簿記理論の研究においても学界を代表する研究成果を挙げられています。

さらに，先生の研究成果の特徴として三十数編におよぶ書評を挙げることができます。先生の書評は，単なる紹介にとどまらず，その著書の理論的背景にまで及び，深い学識と原著者との広い学問上の交流を示すものであります。以上のように，先生は，一貫して原資料にもとづく会計史研究および理論的フレーム・ワークの構築と，会計理論と整合的な簿記理論の構築を研究課題として，優れた研究成果を数多く残され，学問の府としての本学の名声を高められました。

先生の学会における活動も顕著であります。現在，日本会計研究学会評議員をはじめ，日本会計史学会年報編集委員，日本簿記学会会員，日本パチオリ協会顧問を務められ，学会報告・記念講演等数多くの学会活動を通して学会の発展に貢献されました。また1972年4月から1973年3月までのロンドン大学（L・S・E）への留学を通して，多数の外国の会計史研究者との交流を深め，日本の会計史研究を世界に広められました。

このように，先生は本学済経学部教授として，研究・教育の両面において本学ならびに経済学部発展のため，また学界の発展のために多大の貢献をされました。

立教大学は，先生の学術上，教育上の功績の顕著なことにより，1992年7月，先生に名誉教授の称号を贈りました。

先生はいま定年退職の時期を迎えられましたが，経済学部の発展に尽くしてこられました先生のご功績を永くとどめるために，本号を先生の記念号といたします。

先生の今後のご健康とご活躍を祈念すると同時に，これまでと変わらぬご助力を本学と経済学部のために賜りますよう願ってやみません。

1992年7月

経済学部長　丹　羽　克　治